

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720320

研究課題名（和文） 幕末および明治初期における日伊外交貿易関係の歴史

研究課題名（英文） History of Italo-japanese diplomatic and commercial relations in the Bakumatsu and early Meiji era

研究代表者

ベルテッリ アントニオ（BERTELLI ANTONIO）

大阪大学・言語文化研究科・講師

研究者番号：60598431

研究成果の概要（和文）：①幕末・明治初期における日伊外交貿易関係の歴史をめぐる学術専門書の執筆に必要な史料を、イタリアおよび日本で収集した。②香港城市大学において、新潟開港問題における駐日イタリア公使の立場、ならびに 1868 年夏のイタリア商人による新潟訪問一件に関する研究発表を行うことができた。この一件は学術専門書の重要な部分となる。③学会発表・学術論文を通じて、1871-72 年にイタリア王国海軍大尉カルロ・グリッロが日本から母へ宛てた未刊書簡の内容を分析し、公開した。特に書簡の歴史的重要性、そしてグリッロによる日本社会の観察・分析方法について検証を行った。

研究成果の概要（英文）：①In Italy and Japan I could gather many historical documents which will be necessary to write a specialized essay centering on the history of italo-japanese relations in the Bakumatsu and early Meiji Era. ②At the Hong Kong City University I had a chance to make a presentation focusing on the position of the Italian Minister in Japan about the opening of Niigata port and the visit of Niigata by a group of Italian traders in the summer of 1868. This episode will become an important part of the essay. ③Through presentations and the publication of academic papers, I obtained some chances to present, for the very first time both in Italy and Japan, the letters written from Japan in 1871 and 1872 by the Italian Royal Navy's Vessel Lieutenant Carlo Grillo to his mother, focusing on their historical importance and on Grillo's accurate observation and analysis of Japanese society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1, 300, 000	390, 000	1, 690, 000

研究分野：史学

科研費の分科・細目：史学一般、日本史

キーワード：日本、イタリア、幕末明治期、日伊交流史、一次史料、蚕種商人、外交、カルロ・グリッロ

### 1. 研究開始当初の背景

幕末・明治初期に日本とイタリアの間に貿易関係が隆盛を極めていたことを知っている人は非常に少ない。両国の歴史教科書にも、幕末・明治史に関する専門的研究にも、この事実はほとんど触れられていない。

1840-50 年代頃から、ヨーロッパで「微粒子病」（又はペブリン）という蚕の病気が猛

威を振るい始めた。この不治の伝染病に冒された蚕の絹糸生産力は著しく低下し、養蚕製糸業に大きく依存していたイタリアやフランスの経済は致命的な打撃を受けた。したがって、前例のない規模の国際的経済危機を乗り越えるために、ヨーロッパの養蚕家は未感染の地域で無病、そして良質の蚕種を仕入れざるを得なかった。ここから、「蚕種商人」

という全く新しい職業が生まれた。この勇敢な商人たちは微粒子病の感染エリアが拡大し続けると共に、徐々に遠い国、トルコ、ペルシャ、中国、そして最後に日本にまで足を踏み入れることになった。

日本の蚕種の質は極めて良好だったため、1860年代に日伊蚕種貿易の規模は徐々に拡大した。日伊修好通商条約が締結されたのは1866（慶応2）年8月であるものの、イタリア人蚕種商人は1863年から渡日していたとみられる。1867（慶応3）年から、イタリアと日本は本格的に国交を始め、公使と領事が日本に派遣されると共に、毎年夏と秋にかけて、日本を訪れるイタリア人蚕種商人が急激に増加した。

1860年代後半からこの貿易の規模は目覚ましい成長を見せた。蚕種の輸出額は日本の輸出総額の23%以上を占める年もあり、そのおよそ7-8割はイタリア市場に流れるものだった。この貿易関係は養蚕製糸業に依存するイタリア経済を支えると同時に、日本が近代化を成し遂げるために必要としていた膨大な収入を確保させていたため、両国にとって極めて重要なものだったと言える。この貿易は微粒子病を克服するための予防策が普及し始めた1880年代初頭まで続いたが、この20年間は正に日伊交流の黄金時代と言っても過言ではない。

蚕種貿易が盛んだったため、この時代には大勢のイタリア人が来日していた。確認されたおよそ150人の蚕種商人以外にも、彼らの活動を後援するために明治政府と交渉していた駐日イタリア公使や領事もイタリア政府によって日本に派遣され、極めて重要な役割を果たすことになった。また、極東におけるイタリアの権威を高めるべく、イタリア政府は定期的に日本に軍艦を派遣していたため、訪日する軍人も少なくなかった。これらの人物は明治維新で大きな変化を迎える日本を注意深く観察し、書簡、日記、覚書などを書いたり、書物を刊行したりして、我々に「外から見た日本」に関する多くの興味深い情報を提供している。これらの情報を発表して、当時のイタリア人の「日本感」を意識しながら、蚕種商人および駐日外交官や軍人の活動と役割を分析することによって、イタリアは日本の欧米化にどのような役割を果たしたかについて追究する。

研究者はこれまでに博士論文として上記の研究テーマに取り組み、その成果を複数の学術論文・学術発表として公開してきた。また、日本語の運用能力も十分に備えており、史料の読解・分析に当たって支障はない。

## 2. 研究の目的

本研究は幕末・明治期における外交・貿易

関係を中心とした日伊交流史に関するものである。具体的に述べると、本研究の主な目標は以下の通りである。

①イタリア、そして日本の史料館や古文書館を訪れ、幕末・明治初期（1866-1880）に来日したイタリア人公使・領事および軍人の役割、そしてその外交活動に繋がる日伊蚕種貿易の重要性に関する新たな一次史料を収集・分析することによって、現在行っている歴史研究を更に発展させていく。ちなみに、今後の課題（平成25-27年度）は、平成23-24年度に行ってきた研究を基に、幕末・明治初期に関する日伊外交・貿易関係史を中心とした学術専門書の執筆に取り組むことである。

②1871-72年に来日したイタリア人の海軍大尉カルロ・グリッロが日本から母親宛てに書いた書簡（2006年にイタリアで発見した未刊史料）の内容を徹底的に分析し、その重要性について論じること。これらの書簡はイタリアでも日本でも紹介されることがない上に、明治初期の日本を描くイタリア側の私文書は極めて少ないので、学術論文、学会発表を以って、両国で紹介したい。

## 3. 研究の方法

本研究は史料調査・分析に基づくものである。平成23、24年度中は、以前集めた史料を分析しながら、国内外で追加調査を行うことができた。国内では、主に東京にある外務省外交資料館、東京大学資料編纂所で史料調査を行った。また、海外で、イタリア・ローマにあるイタリア外務省歴史外交資料館（Archivio Storico Diplomatico del Ministero degli Affari Esteri）、イタリア海軍歴史資料館（Ufficio Storico della Marina Militare Italiana）、国立中央図書館（Biblioteca Nazionale Centrale）、ヴェネツィアのマルチャーナ図書館（Biblioteca Nazionale Marciana）、ポローニャのサラボルサ図書館（Biblioteca Salaborsa）、トリノの王立図書館（Biblioteca Reale di Torino）などで数多くの一次、二次史料を収集することができた。

また、トリノで、数回にわたり、1871-72年に日本を訪問したイタリア海軍将校カルロ・グリッロの末裔に会うことができた。特に、2013年2月末に、イタリア北部アレクサンドリア（Alessandria）県フェリッツァーノ（Felizzano）市にあるグリッロ家の別荘を訪問することができた。この広大な建物には、本研究の中心となる書簡の原文（手稿）の他にも、カルロ・グリッロが1871-72年に日本を訪問した際に家族に贈った数々の物品（香炉、刀、数枚の浮世絵など）が保管されている。これらの貴重な所有物を実際に見て、

多くの写真を撮影することで、今後の研究に活用できる興味深い史料を入手することができた。



カルロ・グリッポの肖像

集めた史料は**ほぼすべて未刊のものである**。収集した最重要の資料をデータベース化し、発表・論文の準備に際して、イタリア語史料を**日本語に訳しながら**、その内容を分析している。

#### 4. 研究成果

**第一に**、平成 23 年の夏は、幕末・明治初期における日伊外交・貿易関係に関する**学術専門書**の刊行に向けて、主に歴史・文学の専門書を扱う**清文堂出版**という大阪の出版社との交渉が成功した。学術専門書の出版は今後（平成 25 - 27 年度）の主な課題となり、**日伊国交開始の 150 周年である平成 27 年**までに出版する予定である。具体的に述べると、学術専門書の仮題は『幕末・明治初期の日本とイタリア ―蚕種外交を中心に―』であり、平成 25 年 6 月現在の章建ては次のとおりである。

はじめに：幕末・明治期における日伊外交貿易史を研究する意義と目的

第一章：近代日伊交流史の曙～1866 年の日伊修好通商条約の締結

第二章：初代駐日イタリア公使ド・ラ・トゥール伯爵の外交姿勢

第三章：ド・ラ・トゥール伯爵の活動と日伊蚕種貿易

第四章：第二代駐日イタリア公使フェ・ドスティアーニ伯爵の功績

第五章：フェ・ドスティアーニ伯爵の外交姿勢と明治政府

終わりに：近代国家の創設を目指した維新政府の富国強兵・欧化政策におけるイタリアの位置と役割

各章は五節に分かれており、付録として年表、イタリア側・日本側未刊史料や写真などを収録する予定である。

**第二に**、イタリアと日本で収集できた未刊史料に基づき、1868 年に開港される予定だったが、まだ新政府の支配下になかった**新潟の開港**を望んでいた駐日イタリア公使ヴィットリオ・サリエ・ド・ラ・トゥール伯爵の外交活動を中心とした研究発表（「新潟の開港と

駐日イタリア外交官（1868 年）」を、平成 23 年 5 月 15 日に、大阪市北区役所で開催された小さな研究会「近世史フォーラム例会」において行うことができた。その際に得た様々なアドバイスを生かして、この一件に関する学術論文を執筆した。この論文のタイトルは「外交史研究の新視点——一八六八年の新潟開港問題と駐日伊太利亜外交官——」であり、法政大学出版局が刊行する『歴史研究の姿勢』という題名の論集に収録される予定である（発行予定日未定）。

具体的に述べると、この**学術論文の目標**は、次の疑問点を明らかにすることである。

- ①なぜイタリア人商人は命をかけてまで戦闘の舞台となっている新潟を訪れようという決心に至ったのか？
- ②駐日イタリア公使、そしてイタリア外務大臣は新潟の訪問・開港問題にどのように対応したのか？
- ③他国公使はどの立場からこの問題を検討したのか？
- ④イタリア公使にとって、明治元（一八六八）年の新潟訪問はいかなる結果をもたらしたのか？

【結論】より：

「[前略]まず、ド・ラ・トゥールの昂然とした、断固たる外交姿勢のおかげで、イタリア蚕種商人は、明治元（一八六八）年にまだ公式に開港されていない新潟を訪れることができた。この危険な冒険に挑戦した蚕種商人らは新潟で有利な取引をまとめることができず、イタリア公使の計画は商売の面で挫折に終わったことは明らかである。しかしながら、明治元（一八六八）年夏当時の日本におけるイタリア公使の非常に弱い立場を考慮すると、新潟訪問は外交の面でド・ラ・トゥールにとって、大きな勝利だったと言える。明治政府に畏敬の念を持たせる最も有力な外交官である英国公使パークスの反対、そして外交団の冷淡な反応を恐れずに最後まで自らの意図を貫き単独行為に出るというド・ラ・トゥールの外交姿勢は評価に値すると思われる。この勇敢で、若干無謀な外交姿勢は、明治初期の日本に駐在するイタリア外交官の特徴の一つであると言える。

また、本稿で分析したド・ラ・トゥールの書簡の共通点として、英国の外交姿勢に対する不信感と警戒心に満ちた本音が目立つ。イタリア公使の英国に対する辛辣な言葉は駐日外交団における彼の位置づけを充分にはっきりさせるものである。新潟開港問題という一件は、明治政府が駐日イタリア公使の立場をより深く理解する機会だったのではないかと考えられる。幕末・明治初期に日本で

活躍していたイタリア人外交官の特殊な外交姿勢によって、一八七〇年代から国家として共に歩みはじめるイタリアと日本は、未だに断ち切れることのない固い絆で結ばれたと言えよう。[後略]

更に、新潟開港問題とその外交的側面を扱ったこの論文を土台に、更なる史料調査に基づき、東京の外務省外交史料館で、『新潟居留伊国商人「アントリック」ヨリ同港戦争ノ際官軍ノ掠奪ニ係ル蚕卵紙ノ要償一件』というファイル (B-5-3-1-4) を発見できた。多くの未刊史料を含むこのファイル、そして阿達義雄による『怪商スネルと戊辰新潟攻防戦』などの二次史料を分析した結果、以下の事実が明らかになった。

- ① 新潟を訪れたイタリア蚕種商人らは実際戊辰戦争に巻き込まれ、アントニオ・アンドリーコ (Antonio Andrico) という商人が購入していた商品 (蚕種 26017 枚) が薩摩・長州軍に没収されたこと。
- ② 駐日イタリア外交官 (ド・ラ・トゥール伯爵、ロベッキ氏、フェ・ドスティアーニ伯爵) が粘り強く明治政府と交渉したことによって、1872 年 (没収事件からおよそ 4 年後) に、43448.39 ドルにも及ぶ損害賠償金を獲得できたこと。
- ③ 新潟を訪れたイタリア人商人らは、その地で列藩同盟に武器を販売していたとみられるスネル兄弟 (Edward Schnell, Henry Schnell) との接点があり、列藩同盟がスネルの武器販売契約書において、購入した武器の一部を、貴重品だった蚕種で支払うという事実が明らかになった。

従って、蚕種を購入するためにイタリア人商人が新潟に持参した膨大な金額は事実上、列藩同盟が購入したスネルの武器を支払うためのものだったといっても過言ではない。

以上は平成 24 年 11 月 25 日に香港城市大学で開催された『第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム』において発表した内容であり、平成 26 年中に研究論文にまとめるつもりである。

また、これらのエピソードは執筆中の学術専門書の重要な一部となる予定である。

**第三に**、平成 24 年 10 月 20 日に慶応義塾大学で開催された「イタリア学会第 60 回年次大会」において、「イタリアの海軍大尉カルロ・グリッロの書簡に見る明治初期の日本 (1871-72 年)」と題した発表を行って、カルロ・グリッロの書簡を日本で初めて紹介・分析することができた。

この発表の内容をイタリアで収集した新たな史料で補強し、論文にまとめた。この論

文は『イタリア学会誌』(第 63 号、2013 年 10 月刊行予定)に掲載されることが決定している。

カルロ・グリッロについて (論文より)

「カルロ・グリッロは 1844 年 12 月 23 日に、町の名医だった父、ジュゼッペ・グリッロ (Giuseppe Grillo, 1803-1866) と母、アントニエッタ・パルヴォパッス (Antonietta Parvopassu -1889) の二男としてイタリア北部の都市アレッサンドリア (Alessandria) に生ま

カルロ・グリッロのメダルケース



れた。彼の兄妹は長女のアデーレ (Adele Grillo, 1836-1915)、二女アンジョリーナ (Angiolina Grillo, 1839-1920)、長男フランチェスコ (Francesco Grillo, 1843-1917)、そして三女のテレザ (Teresa Grillo-Michel, 1855-1944)。

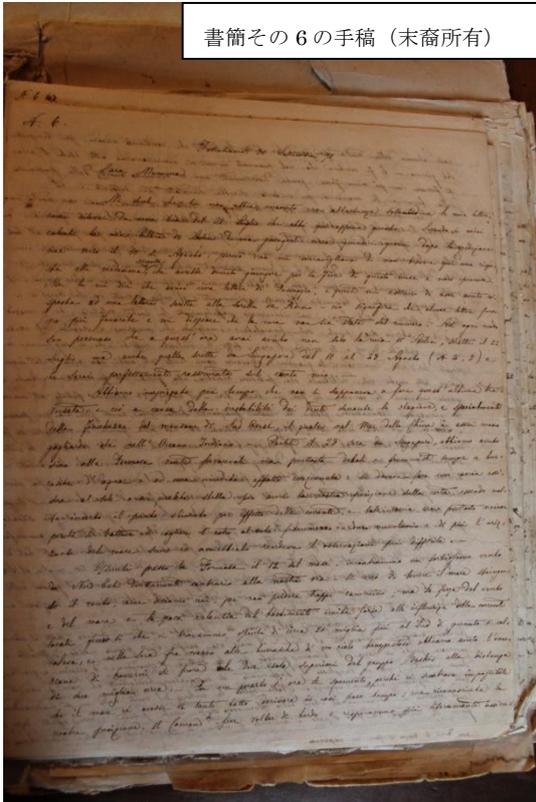
イタリア海軍の歴史資料館に保管されている情報によると、カルロは 1857 年にジェノヴァの王立海軍学校 (Regia Scuola di Marina) に入学してから、目覚ましい業績を挙げた。少尉、そして中尉を経て、1866 年に、第三次イタリア独立戦争の際、イタリア王国海軍にとって惨敗に終わったリッサの海戦 (Battaglia di Lissa) で戦った直後に、二等大尉になり、ついに 1870 年 4 月 1 日に一等大尉に昇格した。「ヴェットール・ピザーニ」号で世界一周航海を行った後も更なる経験を積み重ね、少佐 (Capitano di corvetta, 1879)、中佐 (Capitano di fregata, 1882)、大佐 (Capitano di vascello, 1888) の地位を経て、1896 年に代将 (Contrammiraglio) に昇進した。多くの勲章や称号を授かり、イタリア王国海軍に大いに貢献した人物だとみられる。1906 年 3 月 18 日にトリノで他界した。」

具体的に述べると、この論文の目的は以下のとおりである。

- ① グリッロの日本からの書簡の特徴及びその史料としての価値と重要性を明らかに

すること。

- ②書簡の内容を分析し、グリッロ独特の日本観、そして日本社会および日本文化に対する彼のアプローチを浮き彫りにすること。
- ③明治期の日本を語るイタリア側史料の中で、グリッロの書簡を位置付けること。



書簡その6の手稿 (末裔所有)

以下は「結びに代えて」より：

「幕末・明治期には、多くのイタリア人(外交官、科学者、軍人、商人)が日本を訪れ、様々な記録を残した。公式なものもあれば、非公式なものもある。しかしそれぞれの記録は独特の魅力と歴史的重要性を持つ。特命全権大使アルミニョンの公式な記録は日本に関する基本的な情報を集め、日本を訪問する者にとって、重要な参考書となる。ジリョーリの膨大な記録は幕末時代の日本の文化を、科学者の目で、詳細に描写する。また、サヴィオやピーザの記録は外国人が足を踏み入れたことのない地域に関する多くの情報を提供している。

但し、カルロ・グリッロの日本からの書簡は私文書であり、公式な史料や活字になった記録よりも「正直」なところがある。文体、そしてその筆者の本音と心境を表す描写はフィルターされず、ありのままに読者に伝わるという特徴もある。

従って、上述した史料とは異なる歴史的重要性を持っている。グリッロの書簡は、私文書であるからこそ、明治初期の日本文化との

接触を経験することによってカルチャーショックを受けたイタリア人の複雑な心境を語るものである。このような明治初期の日本関係史料は極めて稀であると言える。

また、グリッロは優れた理解力と鋭い洞察力の持ち主だったと言える。当時、日本を訪れる外国人の中で、グリッロのように、ヨーロッパ人独特の優越感や先入観を捨てるように努力し、「観察」、「考察」、「理解」、「判断」というプロセスで日本文明の本質を掴もうとする人が非常に少なかつただけに、この事実は注目に値する。

従って、この史料はイタリア人が遺した日本関係史料の中で、新鮮でユニークなものであると言える。また、その内容は明治初期の日伊関係の知られざる側面に光を投じるため、日伊交流史の研究者にとって、欠かせない一次史料になるのである。」

平成25年9月19日から21日にローマ(イタリア)の日本文化会館で開催される伊日研究学会(AISTUGIA)の37回大会に際して、イタリアでもグリッロの日本からの書簡の内容とその特徴を中心とした研究発表を行う予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、イタリア海軍大尉カルロ・グリッロの未刊書簡に見る明治初期の日本(1871-72年)、イタリア学会誌(第63号)、査読有[2013年10月発行、掲載確定]

② ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、神戸事件(1868年)とイタリアー瀧善三郎の「ハラキリ」を目撃するイタリア人ピエトロ・サヴィオの報告書を中心にー、イタリア学会誌(第61号)、査読有(2011年10月発行)217-236頁

③ ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、明治政府の樹立と駐日イタリア公使・領事的外交活動についてーイタリア側公文書を中心にー、ICIS次世代国際学術フォーラムシリーズ第3輯『文化交渉における画期と創造』、査読有(2011年4月)93-112頁

[学会発表] (計3件)

① BERTELLI Giulio Antonio, L'epistolario inedito di Carlo Grillo (1846-1906) - Un giovane ufficiale di Marina in Giappone nel primo periodo Meiji (1871-72), XXXVII Convegno AISTUGIA (伊日研究学会第37回

大会), 2013.09.19-2013.09.21, Istituto  
Giapponese di Cultura in Roma(在ローマ日  
本文化会館) ローマ、イタリア [発表確定]

② ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、新潟  
を訪問するイタリア人蚕種商人と戊辰戦  
争(1868年) — 駐日イタリア外交官の活  
躍を中心に —、『第九回国際日本語教育・  
日本研究シンポジウム』、2012年11月25  
日、於：香港城市大学(香港)

③ ベルテッリ・ジュリオ・アントニオ、イタ  
リアの海軍大尉カルロ・グリッロの書簡に  
見る明治初期の日本(1871-72年)、イタリ  
ア学会第60回年次大会、2012年10月20  
日、於：慶応義塾大学(東京)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

ベルテッリ アントニオ (BERTELLI  
ANTONIO)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・講師  
研究者番号：60598431

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし